

手紙

No. 1285

大正三年九月十一日 午後零時四十八分 佐母保局發  
大正三年九月十一日 午後二時三十八分 海軍局着

發信者

受信者 海軍大臣

電報譯

十月午後五時旺洋丸出港之際被其船首  
ヲ以テ十五番繫留浮標ニ繫留セル平戸ノ  
左舷後部發射管ノ直前ニ觸衝シ一吋  
外板全長ニ直リ縦ニ深約十吋凹シ生シ發射  
管匙形取付部毀損附近カツハシノ取附口ヨリ  
多少ノ侵水アリシニ直ニ之ヲ止メ得タリ本日入渠上  
修理ヲ行ヒ狀況ヲ報告スヘシ日數船体ニ週間  
發射管ハ船体修理結了後五日間ノ予定

司法局



海軍

0454

海軍

下

供覽

佐鎮第六九二號

大正三年九月十七日

佐世保鎮守府司令長官藤井

海軍大臣八代六郎殿

局員 特設砲艦撫順丸機関故障一件

軍務

和山

和格

艦政本部

軍令部

特設砲艦撫順丸大正三年九月七日所定ノ機装ヲ終リ  
 日佐世保軍港ヲ出航シ基隆ニ向ヒ原速九速(去機械回航  
 五三)ニテ航中翌九日ノ候險悪ニテ風波亦強ク航行  
 艱難ヲ經テ九日某垣島附近ニ達スルヤ午前十一時  
 三十層樹林左舷ニ約四十五度傾キ利邦去機械依一圧  
 汽笛ニ聯動スル至送水唧筒吐出傘管上下蓋及同  
 扉蓋團(氣)ニ鑄鉄製)甚ク鑄裂シ其一部ヨリ海水

海軍省接受 8. 9. 20

九月

軍務局

0455

機械室内ニ噴出シ同唧筒ノ使用全然不可能トナルニ至レリ  
是ニ於テ去送水唧筒ノ復水器ヘノ吐出口ヲ木栓ニテ填塞  
シ去送水水管ノ中間ニコバラス止唧筒ノ送水水管ヲ接續  
シアルヲ利用シテ復水器ヲ冷却シ去送水ヲ運轉ヲ經續シ修  
理ノ為メ十四日當軍港ニ帰着セリ破損部ノ復旧修理ハ  
約三週間ヲ要スル豫定ナリ

右報告ス

終

0456

紙 罫 案 起

連後

大正三年九月十八日  
 起案者 藤田  
 發付係 藤田  
 發付後起 案者捺印

(主務) 軍務局長

副官  
 參事官

大臣

次官

大正三年九月十八日

次官

第壹期 松浦航校 索ノ牛  
 不明之舟 校索方出 餉ニ付

號番

二七三三

軍務	官房	局部	受月日	發月日
人事	醫務	經理	司法	鑑政
教育	臨建	水路	軍令	

九月十日  
 大臣官房受

0457



軍務 供覽

管第一〇八〇号

文書課長

大正三年九月十七日

海軍次官 鈴木貫太郎殿  
通信次官 中谷弘吉



九月十日

船舶搜索ノ件  
補助機關附帆船第壹明通丸行衛不  
明ノ故ヲ以テ別紙寫ノ通搜索方願出  
候ニ付可然御取計相煩度候

官第一〇八〇号



0459

●  
検索頁

一、船舶の種類及名称

第七五號、補助機関附帆舩、菊老明通丸

二、總噸數

百九拾噸參

三、舩籍港

東京市

四、船舶所有者、氏名又ハ名称

ラサ島燐礦株式会社

0460

本船の特徵

船体、木造外舷黒塗ニ本橋、スクーター型帆舩  
 ニシテ白塗ヲシテ、記標アル煙筒一個ヲ有シ船底  
 ハ銅板ヲ以テ張ラル

0461

大乗組員ハ船長以下拾四名ニシテ氏名住所左之通り

職名	氏名	生年月日
船長	野村海藏	文久三年十月十日
水夫長	山本金次郎	明治二年八月十日
水夫	濱勇太郎	明治二年九月十日
合	淀川喜吉	明治十七年一月十九日

本籍

愛知縣知多郡亀崎町字西九十二番地  
 今縣幡豆郡西尾町鶴城  
 石川縣羽吹郡福浦村ヒ、一番地  
 宮城縣牡鹿郡右卷町湊田町四十三番地



火夫見習	火夫	火夫	全	油	機関長	本炊夫	全	全	全
君野英平	水野竹治郎	湯浅米吉	小川省三	古沢友次郎	知念 浦	小倉為市	佐々木安次郎	小招仁三郎	
明治三十三年 十月二十八日	明治三十七年 正月二日	明治三十七年 六月十五日	明治三十九年 七月十九日	明治三十九年 五月十五日	明治三十九年 五月十五日	明治三十九年 七月十八日	明治三十九年 六月五日	明治三十九年 二月九日	

北海道後志國美園郡美園町大字原若村  
 岩手縣上閉伊郡釜石町三三五  
 京都府上桑田郡黒田村字廣河原二七  
 沖繩縣島尻郡佐敷村字仲伊保三一五  
 茨城縣真壁郡太田村大字玉戸四八  
 新潟縣北蒲原郡葛塚村七二二  
 北海道後志國余市郡余市町大字沢町畑一三  
 千葉縣海上郡飯岡町三三一五  
 千葉縣安房郡館山町館三二二  
 千葉縣海上郡本郷子町一三六

七、積荷

ナシ

八、事實、顛末

大正三年七月十一日午後四時那霸港ヲ発シ十六日午前十時ラサ島ニ到着シ其後燐礦石積載ノ為メ全島ニ碇泊中今月二十一日午後ヨリ天候険悪トナリ波浪高マリ二十三日ニ至リ俄カニ北東ノ暴風雨トナレリ午後六時頃全船ハ碇綱ヲ切断セラレタル為メ繫留ニ堪エズシテ激浪ト烈風トニ戦ヒテ、暫時南西ノ

0463

方向ニ押流サレ終ニ其姿ヲ見失フニ至レリ翌  
二十四日ヨリハ連日強烈ナル南風ニ襲シタルヲ以テ  
只管其歸島ヲ希待シツ、アリタルモ更ニ船影ガニ  
認ムコトナク或ハ附近ノ港ニ避難シタラシト思  
惟シツ、爾来一月ヲ經過セル今日ニ至ルモ杳トシテ  
消息ヲ絶シ同船ニ関シ何事ノ音信ニ接セザル  
次第ナリ

右ニ付キ特別ノ御詮議ヲ以テ御捜索被成下度歎

0464

伏ヲ奉願上候

大正三年九月十日

東京市麹町区有樂町一丁目一番地  
ヲサ島燐礦株式會社

社長 表學博士

恒藤規隆

0465

海軍省附屬

軍務課

大正三年九月十三日

省副官

大正十號  
大正十號

大正三年九月十三日

二七二號

Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a memorandum or report. The text is dense and difficult to read due to the cursive style.

三三三

大正三年九月十三日

省副官

Handwritten notes or signatures on the left side of the document.

Handwritten notes or signatures on the far left side.

花崎

0466





色  
回  
軍  
海  
軍

海軍

海

花  
崎  
栢

0469



昭和

大正三年九月十一日

東京市麹町区有樂所二丁目一番地

株式會社

恒藤規隆



ラサ島燐礦株式會社

法正隆

東京市麹町区有樂所二丁目一番地  
電話本局一四〇三二七〇番  
一四〇六番

船舶搜索願之件

弊社所有船第港明通丸七月下旬以来

尾郎神大東島二松了行方不明

物成候了ハ高繁務中恐入候得共

ラサ島燐礦株式會社



九月十一日

0471 0470



方搜索方特別之法詮議相成度別紙類末  
膏相添以改奉願上候

（Faint vertical text, likely bleed-through from the reverse side of the page)

0472

0472

搜索 噸

一、船舶の種類及名称

第七一七五号、補助機関附帆船、第走明通丸

二、総噸数

百九拾噸

三、船籍港

東京市

四、船舶所有者ノ氏名又ハ名称

ラサ島燐礦株式会社

五、船舶ノ特徴

船体、水造外舷黒塗二本樁「スクーナー」形帆船ニシテ  
白塗「ラ」ノ記標アル煙筒一個ヲ有シ船底ハ銅板ヲ

ラサ島燐廣株式会社

0473

十四日  
人、数、々

以下張るル

大乗組員八船長以下拾四名、レテ氏名住取左之通り

職名	氏名	生年月日	籍
船長	野村海藏	文久三年拾月拾日	愛知縣知多郡滝崎町字上西九十二番地
水夫長	山本金次郎	明治十一年八月十一日	今縣幡豆郡西尾所鶴城
水夫	淡勇左郎	明治二年九月十四日	石川縣羽咋郡福浦村ヒ一番地
令	淡川喜吉	明治十七年一月廿九日	官城縣牡鹿郡石巻町湊田所字二番地
令	小沼仁三郎	明治廿八年二月九日	北海道後志國美園郡美園町大字原若村
令	佐々木安次郎	明治廿二年六月五日	岩手縣上閉伊郡金石所三二五
令	小倉為市	明治十三年七月十八日	京都府上桑田郡黒田村字倉河第三七
炊夫	知念浦	明治十一年五月廿三日	沖繩縣島尻郡佐敷村字伴保三一五
機関長	古沢友次郎	明治十一年五月十五日	茨城縣真壁郡太田村大字玉戸四八

0474

油	差	小川省三	明治二十年七月廿九日	新潟縣北蒲原郡葛塚村七二
令		湯浅末吉	明治廿三年六月十五日	北海道後志國余市郡余市町大字沃所畑一三
火	夫	水野竹治郎	明治廿七年十二月二日	千葉縣海上郡枝岡町三二一五
令		都筑拓太郎	明治廿二年正月三日	千葉縣安房郡鋸山町館三二二
火	夫見習	君野典平	明治三十年十月二十八日	令 縣海上郡本郷子所一三六
七、積荷				
ナシ				
八、事實ノ顛末				
<p>大正三年七月十一日午後四時那覇港ノ發シ十六日午前十時ヲサ島ニ到着シ其後燐礦石積載ノ為メ今島ニ碇泊シ今月廿二日午後ヨリ天候陰悪トナリ波浪高ヨリサ三日ニ至リ俄カニ北東ノ暴風雨トナレリ午後六時頃今</p>				

ラナ島海廣朱式會社

0475

船ハ碇綱ヲ切斷セラルル爲ノ繫留ニ堪エズレテ激浪ト烈  
風トニ戰ヒツ、暫時南西ノ方向ニ押流サレ終ニ其安ヲ見  
失フニ至レリ翌廿四日ヨリハ連日強烈ナル南風ニ襲  
レタルヲ以テ只管其歸島ヲ希待シツ、カリタルモ更  
ニ舩影ガニ認ケルコトナク或ハ附近ノ港ニ避難シ  
ランカト思惟レツ、爾来一月ヲ経過セル今日ニ至ル  
モ杳トシテ消息ノ絶レ同舩ニ聞レ何尋ノ音候ニ接  
セザル次第ナリ

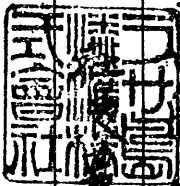

右ニ付キ特別ノ御詮議ノ以テ御搜索被成下度此啟  
伏テ奉願上候

大正三年九月十日

東京市麹町区有樂町二丁目一番地

0476

島嶼廣末氏會社


 島嶼廣末氏會社  
 廣末 幸博 士  
 恒 藤 規 隆  


0477



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

ミナト島船政資料館

0478

逕如左

逕送局長

秋山

局員

田原

原

藤田

遞信省

馬刻別紙写ノ通小笠原丸船長及工率主  
張是島拔師ヨリ報告有之矣ニ付不取敢  
申送付矣也

大正三年十月一日

田中逕信局長

海軍省軍務局長殿

構  
所  
以  
只  
鑑  
守  
之  
ニ  
電  
法  
知  
一  
ニ  
謝

右清

0479

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

逓信省  
經理課  
印刷

0480

羅 言 拜

大正三年十月二日  
軍務局

横 野 大

小笠原丸遭沈の間の通信者

通信の長と通條別紙一通計

内通知す  
L 由 大

長

時 本百年  
向ヶ出航  
作浪後  
員傷シ  
連カヤ  
ライフ  
目下在  
の中テツキ  
機官凡也

0482 0481

十竹系丸遭難の因るる船長と通信の長  
宛報出の写

着十月一日午後二時早あか 清水局着十月一日午後二時

昨日午後一時半暴風あり高ノ浪豆妻良子浦ニ避難し本午  
前五時半風後西ニ急轉し碇泊急険ナルニ依リ沖合ニ向ケ出航  
シタリ其時大浪數回船首ヲ襲ヒ船首ニ於テ執職中者皆  
水中ニ入り幸シテ救命セシモ不幸ニシテ水夫次長山江五作浪後  
ラハレ行断不明トナリ高田囃托及水夫長以下六名負傷シ  
タニモ可シモ輕傷ナリ今本船ノ危急ノ場合ニシテ全連力ヲ  
以テ高且ツ前進スルヲ得セリ以テ到底救助ノ見込ナラライフ  
三個ノ投棄スルニ其後前進シ雲時中清水港ニ入港セリ目下在  
山江五作ニ対シ子浦向ク船中本船ノ船首樓ブリックデッキ  
リールスマシヨシニ各船尾ステイヤリキルル及ニコルバニ其  
他損害凡モ航海ニ支ナキニ付長崎ニテ修理ノ見込

0482 0481

小笠原丸遭難ニ関スル全船員長技師  
ヨリ通信局長宛報告字

十月一日 后三時十分 清水局宛

遭難ノ模様ハ別電報告ノ通ニテ之レヨリ先キ無線  
ヲ以テ報告セント務メタルモ試験室並ニ無線電信  
室等浸水ニ為シ無線電信機ハ使用出来ず目  
下停止中高北送ノ機軸其他ハ取調ノ上損害ノ  
有無更ニ少報ス

0483

通新紙

寫

海軍省事務

軍務局

三驅第八一號

大正三年十月二日於長浦

第三驅逐隊司令水野作造

横須賀鎮守府司令長官伊地知季珍殿

局員

難破船搜索報告

命依り難破船搜索目的ヲ以テ大正三年十月二日

午前四時四十五分夕霧霧叢雲ヲ率テ長浦ヲ入

今六時十分城ヶ島ノ南西約一哩ノ地点ヲ解列

夕霧ハ江ノ島ニ直行ス途中今島ノ南々東方約四

五哩ノ所ニ於テ数個ノ生澳籠ト二三ノ澳舟断片ヲ

見ルニ何レモ人ナシ尚ホ江ノ島東側ヨリ南西側ヲ

搜索ス後七時四十分江ノ島ノ西側般泊ス

横須賀第一八九號

副官森本

8. 10. 4

軍務局受

0484

叢雲の解列後六七哩尚ホ西方ニ航シ其言リ  
 漸次北向シテ大磯沖ヲ経テ沿岸ヲ傳ヒテ搜索  
 ヲ行ヒ八時五十分江ノ島ニ来泊ス 途中江ノ島ノ正  
 南約十哩附近ニ数艘ノ生澳籠ト一隻ノ破舟  
 ヲ認メ之ヲ檢スニ人ナシ  
 午前九時腰越村長及ヒ今駐在所巡査来艦ス其  
 談話要領次ノ如シ  
 昨朝八時頃南風止ニ北風除カ吹キ来リタル際海  
 水一瞬時非常ニ減退シ更ニ数丈ノ高浪ニ三四隻  
 来リ附近ニテ平余隻ノ澳舟(腰越村民約百  
 人分乘)及ヒ石油発動機艇一隻(伊豆方面ヨリ来  
 リシモノ)ヲ転覆破壞シ行方不明者腰越村民  
 三九名發動機艇乗員約十名ニシテ其他ハ皆少

0485



ノ負傷者ヲ生セシモ兎ニ角收容スルコトヲ得テリ而シテ  
其時ヨリ本日迄ハ未タ一人モ發見セスト云フ目下腰  
越河口兩村民慣カシテ左ノ如ク搜索中

一陸ニ近ク地曳綱ヲ用フ

二漁舟統出シテ島ノ附近三四里間ヲ搜索ス

三石油發動機船ニ隻ヲ沖合ヲ搜索ス

流失方向ハ主ニ三崎ニ至ル海面ナランモ或ハ伊東方面

ニ流失セルヤモ知レズ可成兩方面搜索アリタリ者甲

出ラタリ

右ニ付キ左ノ如ク搜索ニ決ス

叢雲ハ江ノ島ヨリ正南ニ引キテ線以東三浦半島

間ヲ精密ニ搜索シ更ニ三崎附近ヨリ洲崎ニ至ルコト

夕霧ハ真鶴崎ヨリ熱海初島伊東附近ヲ搜索スルニ

毎

日

0486

ト、午前十時行動ヲ起セリ

夕霧ハ豫定ノ如ク行動シタルモ海上ニ漂流物ヲ見ス

只初島東方約一哩於テ澳舟(田越村小坪

三五鹿島漂流所村)ヲ発見シタルモ人ナシ

更ニ伊東ヨリ城ヶ島ニ至ル海面ヲ搜索シ午後三時劍

崎附近ニ於テ叢雲ニ會ス叢雲ハ豫定ノ如ク搜索

ヲ行ヒタルモ何等発見スルトコトナシ

午後四時十五分長浦ニ帰着ス

江島附近並道ノ状況ハ腰越村長花ニ令駐在巡

査ニ話シ済ム有之又其ノ以後ノ状況ハ電報ヲ以テ

鎌倉警察署ニ通知済ム有之矣

被災地附近六川口腰越江島ノ三ヶ所巡査駐在

所アリ共鎌倉警察署ノ管轄ニ屬シ令署ヨリ

0487

電話通シ居レリ

兩艦共極力搜索ニ勉メタシモ何等得ルトコロナカリシ  
ハ遺憾トスルトコトニ有之候

右報告ス

(別圖一葉添付ス)

(伏)

海軍

0488

運  
修  
水

大正三年十二月十四日

大正三年十二月十四日

軍務局

松山

局長

局長

大津要港部參謀長菅野勇

藤田



上海軍務局長秋山真之殿

驅逐艦曙ノ損害ニ関スル件

軍務機密第四一八號御照會ニ係ル本件發生ノ當時  
ニ於ケル曙ノ現状ニ當部ニテ艦ノ任務遂行上並ニ保安  
上全然欠ル所ナキモト認メサリレニ付其際不取敢  
警告致シ候ヘ共元々知多丸ノ觸衝ニ關鍵致シ居リ  
候ニ付過般末右事件ニ関シ審査方函館地方

機密第四一八號

録

置

3. 12. 17

0489

海員審判所交渉中屬ス判決ヲ俟テ其事情  
ヲ確認シタル上テ更ニ詮議ヲナシ處理可相成候ニ付  
御了知相成度  
右回答ス

終

0490





下  
供覽

大正三年十一月二十九日

大正三年十一月二十九日

入湊要港部司令官上村經吉



海軍大臣八代六郎殿

軍務局

驅逐艦曙損害ニ関スル件

大正三年十一月二十四日室蘭港碇泊中ナル當部所屬

驅逐艦曙ハ北海道函館區駒止町白鳥助藏

所有汽船知多丸ニ觸傷セラレ艦首左舷ニ屬

シタル外六兼ノ損傷ヲ受ケ航海ニ差支ラズシ

タルヲ以テ應急修理ヲナシ艦底塗撫ノ為メ

入渠ノ豫定ナリニシテ二十八日當部ニ歸港

司法局

艦政本部



十二月二日  
軍務局接受

0493



シ目下不取敢修理ニ着手シ右事件ニ對シ  
テハ函館地方海員審判所ヲ介シ夫々交渉中  
ニ御座候

右損害復旧費概算

一 工費 百八拾圓

一 材料費 九拾五圓

合計 貳百七拾五圓

一 工事日數 貳週間

右報告

堀江第四駆逐隊司令提督 駆逐艦曙損害

ニ関スル報告書壹通

官由曙 駆逐艦長提督 駆逐艦曙汽機室觸衝艇

致木知多丸船長始末書壹通 添付

(終)



四驅機密第一六八号

大正三年十一月十八日於大湊

第四驅逐隊司令 堀江 鶴彦



大湊亞港部司令官上村 經吉 殿

驅逐艦 曙 損害ニ関スル件

大正三年十一月十四日 驅逐艦 曙 對汽船 知多丸 觸衝事件  
 二號 幸取 調候 処別 紙官 田曙 驅逐艦 長 桂 出 閣 係書  
 類ノ 通り 事實 相違 無之 能 衝ノ 責ハ 全 然 對 手 船  
 知多丸ニ 在リテ 曙ニ 於テハ 事前 事後 均 何等 問責ノ  
 点ナシト 認ノ 候 係 別 紙 閣 係 書 類 相 違  
 右 報 告 ス



海軍

0495



曙松密第五号

大正五年十一月二十五日 於宜蘭港

曙松密船長 宮田源八 印

第四驅逐隊司令 佐江龍彦 殿

驅逐艦曙松密船長 多丸觸傳 報告

今日本艦宜蘭港碇泊中 大正五年十一月十四日 報告 多丸觸傳

（古）右艦九枚艦首 觸衝之損傷 報告 又（古）之件

其際 應電報 予以 報告 且 其後 詳細 報告 付

軍艦 執 如 有 之 候

一 相互 碇泊 位置

（別圖 一 紙）

二 觸衝 前 狀況

每 頁

當日、朝来北西ノ風強吹シ正午風力四乃至五、晴雨計未定  
 時寒暖計四七度ノ余ニ爾後晴雨計ハ漸次上昇スレ  
 上ニ風力次第ニ加ハリ午後八時風力五乃至六晴雨計未  
 定未定港内波浪強大ニシテ船ノ動揺激シノ一時、陸上  
 交通杜絶スルニ至リ、船ヲ當直橋ハ絶入ノ船位並ニ四  
 圓ノ状況ニ注意シ午後八時六分橋着第ニ一ノ号機  
 項ニ無線電信當直ヲ終了スルト同時ニ空中線ヲ却  
 口ニ端舟ヲ引キ入シ甚矣準備ヨク汽罐埋史ノ儘  
 セリ  
 之ニ先キ午後四時頃本艦ハ船艦尾約百率米附近ニ  
 錠泊シ居ル汽船知多丸ハ速錨セシ多揚錨ノ上錨地ヲ  
 變更シ更ニ港内入り本艦ハ船正横四百米附近ノ  
 位置ニ錨セリ（別圖参照）

當直將校午後九時頃當番者ヲ呼ビ風ノ模様ヲ向トモ  
 風向、風力共殆レト著レトモ此船ノアリシ海船ノ前航  
 九ノ揚錨ニツツル昔届ケ出テタリ此時當直將校ハ該船  
 ガ殆レトモ艦ト平行狀態ニテ航海諸燈ヲ点シ揚錨ニツツ  
 見ラ見シヲ以テ正レシク出港スルモト思考シ風力強キ故該船  
 ノ出テ特ニ注意シ其接近シ来リタルヲ發見セハ直將  
 校出ツテ當番者ニ命ジタリ  
 次デ午後九時五分前部艦橋附近ニテ直將校當番者  
 前航該船が本艦々首ニ接近シ来リ將校ハ直將校  
 ヲ報告シ来リシ後瞬時にテ直將校當番者ニ命ジテ下  
 直將校ハ衝撃ヲシ懸シ音響ヲ聞ケリ  
 三、觸衝ノ狀態ニ處置  
 之レヲ先キ當直將校ハ同船員約来ヲ待ツテ斷

海 軍

ト金し直ケニ艦橋ニ至リしハ汽船知多丸ハ約九半度ノ東  
ニテ一度ヒ本艦ヲ舳艫首ニ衝突ノ後ニ米突針  
離レ居ルルニ知多丸ハ舳艫首(同船ハ舳艫首釣錨ノ  
状態ニヤリ)ノノストツクハ本艦ヲ舳艫首釣錨(同ノノ  
ト緊張ス)ニ用ノ如ク揚ク風多ク該汽船ハ壓流

本艦ハ舳艫首



知多丸ハ舳艫首



本艦ハ舳艫首

蓋々本艦ハ舳艫首釣錨ノ緊張ニシテ波浪ノ大ニテヨリシ生々  
見ヒタメ急遽揚錨様ヲ用意シ舳艫首釣錨ヲ之ニ持シテ  
四ノ時ノ如ク舳艫首釣錨ヲ伸出スルニ樹ノ如クトモシ

夕是夜ノ傳達困難ニテ且ツ相立船俵ノ動搖著シト加凡ク  
 鎖緊張シテ亦其困難ヲ来セリ  
 此間ニ該汽船ハ錨ヲ本艦錨鎖ニ掛ケル儘固ク奉  
 本艦左舷側ニ横付状態トシテ以テ右舷側ニ  
 防振物、釣糸等ヲ用キ且ツ豫防シ一方極力スリッポ  
 ノ切斷ニツトメタル結果午後十時漸クカスリッポ  
 錨鎖ヲ伸張シ解クコトヲ得十時五分今午  
 解スルヲ得キリ

四、損害ノ程度

離衝後即時損害ノ程度海水ノ有無ヲ取リ調べ流  
 別級損害個所ヲ見取回ニ平尺通リ損害納メ火  
 シテ此後ニテハ艀泊中ハ浸水ノ慮ナキニ航路  
 ニ差支ヘリ、依テ取テ取入ス航路ニ得ル程度ニ慮ス

處置ヲ施行セリ、損傷箇所ノ主たる

一、艦首九輪ニ屈曲ス

二、強固片脱落

三、錨鎖孔脱落

四、右舷側上甲板ヲ五呎四寸艦首ヲ四呎ノ間

三寸ノ凹凹ヲ生ズ

ホ「バック」艦首ヲ五呎ノ間裂損ス

五、左舷外板ノ「リベット」(若干)切断

六、破孔三ツリ大者ヲ隔五寸長サ七寸

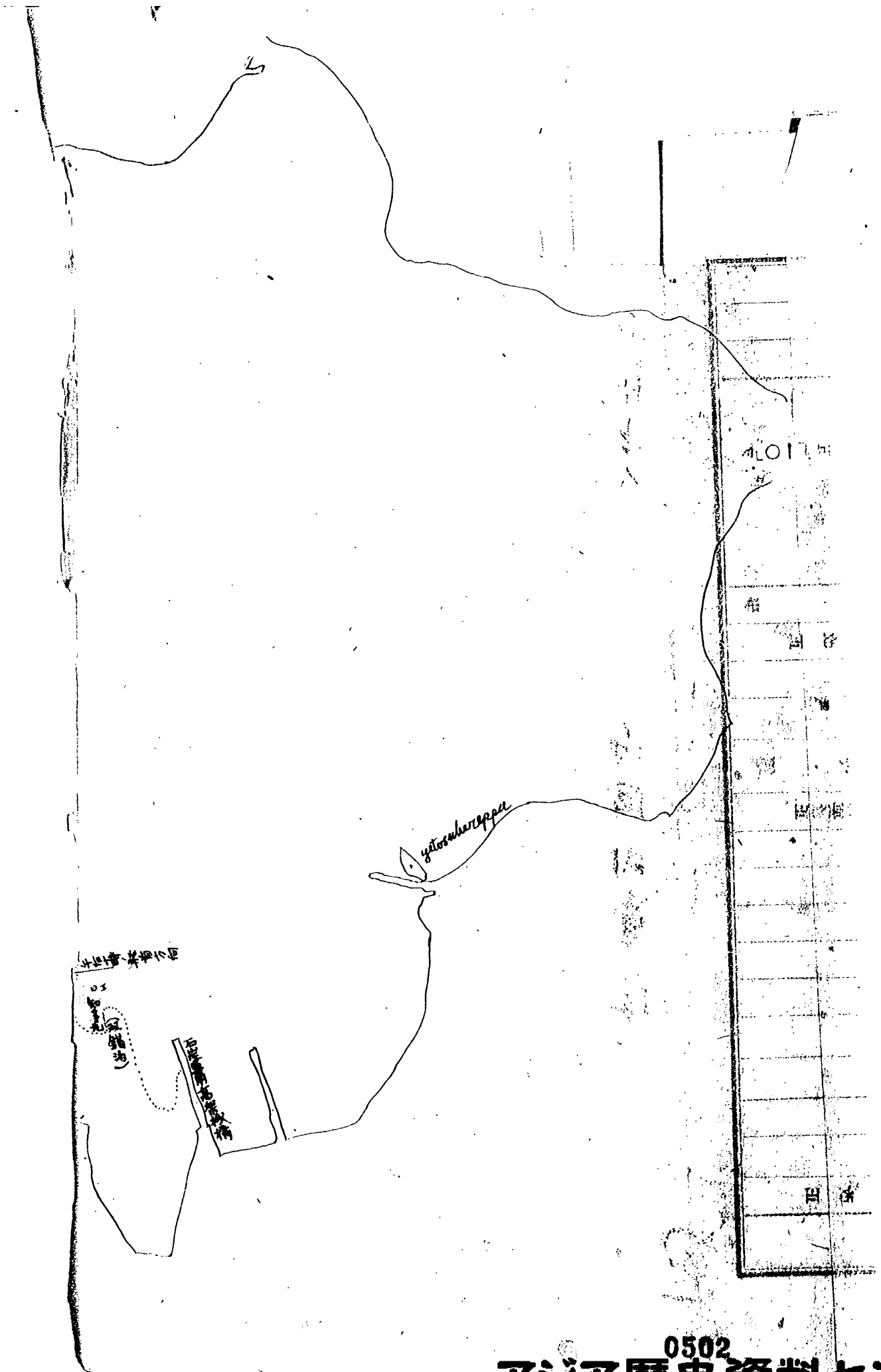
右報老人

所回の業係

返

0501





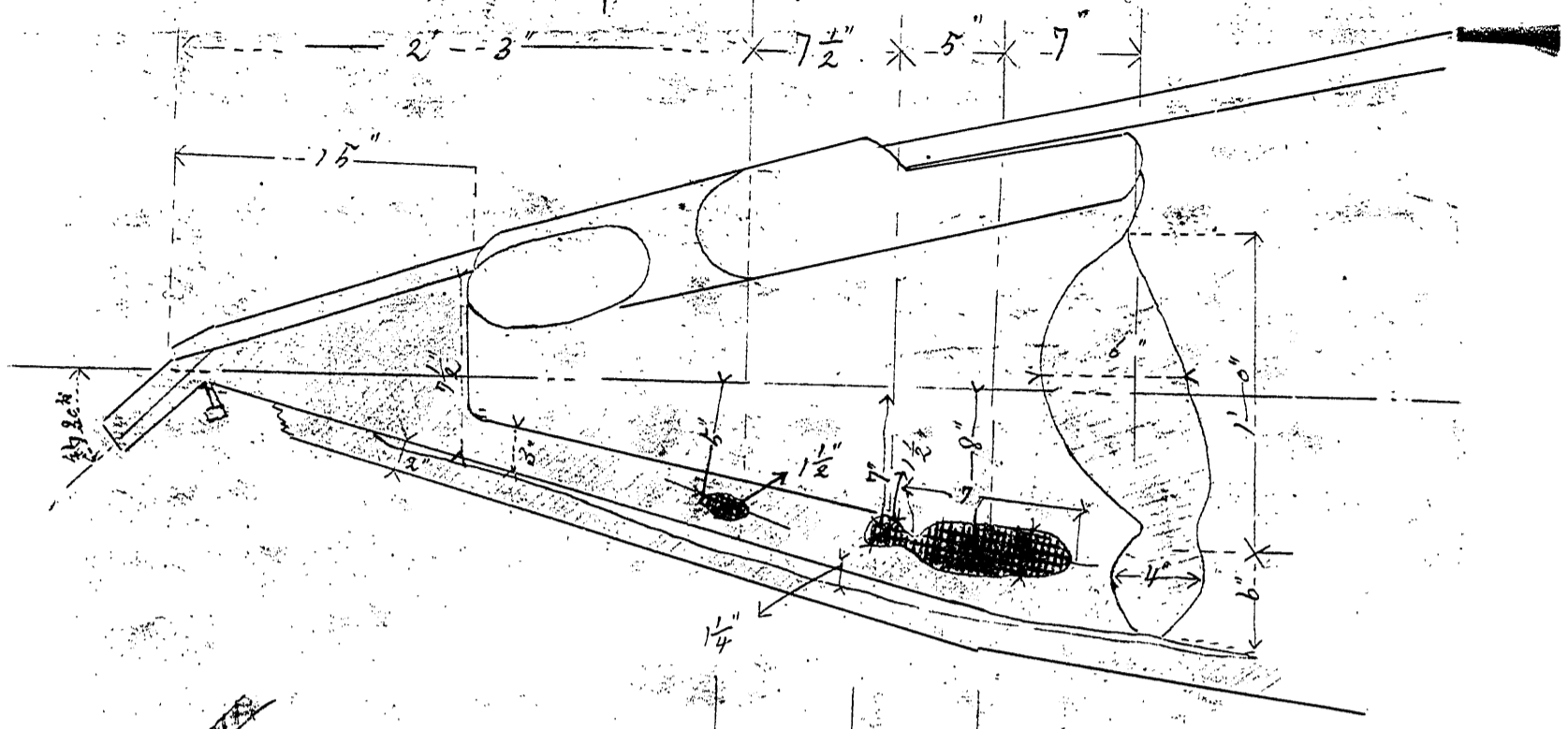
0502

アジア歴史資料センター

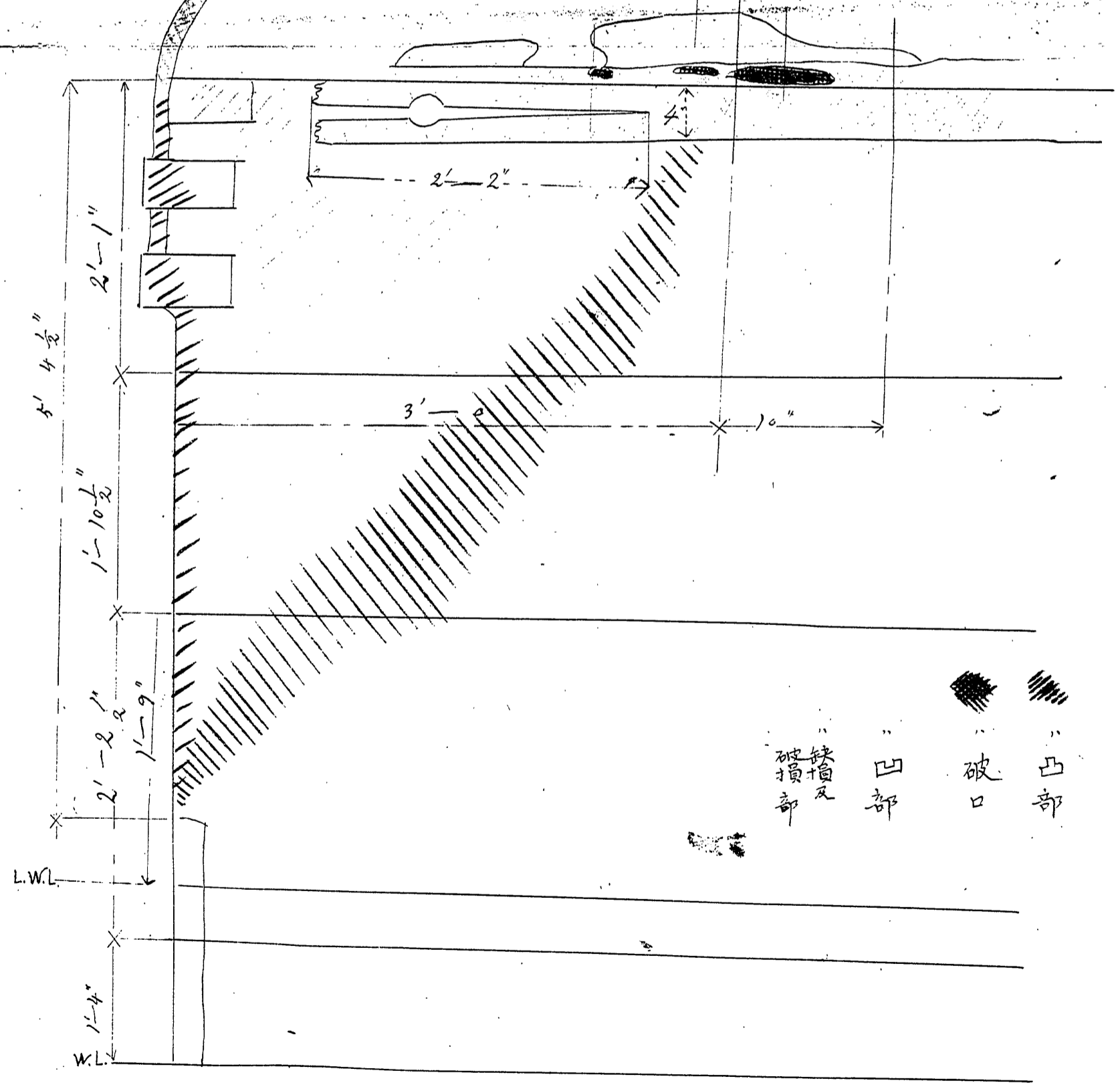
Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp/>

艦首平面圖



左舷艦首側面圖



姓末書

一、汽船 知多丸 船噸數 四九八、二の船作銅鉄

一、所有者 北海道函館區船止所 白鳥 助藏

一、船長 乙種船長 石川 鶴鹿島郡七尾町字松葉町 牧木 善松

昭和五年五月廿日生

右本船義木村置石積載大正五年十月三日午後九時室蘭港ヲ抜錨下  
 北郡老部ヨリ航行セトシテ登陸ノ際北西ノ雄風特ニ西錯共何時  
 ニテ天候下ノ準備ヲシテ航進ヲ始メタルモ風力増進ノ為メ風下破  
 ノ御本艦ニ接觸シテ御本艦ノ錨鎖ニ本船ノ錨鎖カシラズ處ノ全  
 連方後退ヲシタルモ其ノ効ナキ内九時半頃御本艦ノ艦首ノ吹  
 寄セラレ接觸損傷ヲ生シテ天候改テ縮望極ニ存候此致候  
 末書依テ如件

大正五年十月三日

右船長

牧木 善松 (印)

海軍

海

軍

部

一

七

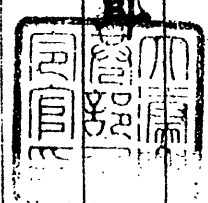
二月廿二日

海軍省接受

海軍省第四八號ノ二

大正四年二月十六日

大湊要港部司令官口真市太郎



海軍大臣八代六郎殿

軍務局

司法部

驅逐艦曙汽船知多丸接觸事件之關係件

大正三年十一月二十九日大湊機密第三四八号ノ二ヲ以テ  
報告致候驅逐艦曙汽船知多丸接觸事件  
ニ就テハ豫テ函館地方海員審判所ノ事件  
ノ審査依頼致シ置キ候處今般別紙ノ通  
リ裁決有之事件ハ知多丸船長ノ過失ニ起因  
シタルモノト認め然レトモ當時曙葉員ノ所置ニ

海軍

0505

27-2-22

存リテ天宮田曙驅逐艦長報告ヨレハ最善ヲ  
盡シタルモノト認メ難キ廉有之候得共之レヲ  
懲罰ニ處スル程度ナラサルヲ以テ将来ヲ訓戒  
致置候  
右報告ス

裁決書一部一添付

程

左所ハ梅吉 野田 十ノミナリ 梅吉 野田  
梅吉 野田 十ノミナリ 梅吉 野田  
梅吉 野田 十ノミナリ 梅吉 野田  
梅吉 野田 十ノミナリ 梅吉 野田

0506



大正三年第四一號 裁決書

石川県珠洲郡 小本村

字 小本十字五十八番地

平氏

被審人 牧本 善松

右者、對ル汽船知多丸 驅逐艦曙 接觸ノ件、關シ審  
理ヲ遂ルル處

被審人 牧本 善松ハ乙種船長 海技免状ヲ受有ニ渡島  
國函館區ニ船籍港ヲ定ムル 白鳥助藏 所有汽船知多丸  
數四百九十八噸ヲ有シ知多丸ニ船長トシテ兼船中守兼  
ハ大正三年十月十九日 越前守 佐野新 島川ヲ登リ 木材積取  
リ者メ同日十九日午前九時七分 陸奥國下北郡 赤部ニ  
入港シ其後引續キ天候不良ノ爲メ何役持取ラス

0507

漸くお村四百石ヲ精取リ乞トキ同日午三時北西ノ強風  
 トナリ加之波水又欠乏セルニ依リ之ヲ補給ノ為メ同日午  
 六時五分同所ヲ發シ翌日二十四日午前零時四十七分膽振國宮  
 蘭ニ入港ニ日本郵船株式會社浮標ヲ西微南距離約半鐘  
 水深ニ尋ニ分ニノ所ニ碇泊ノ上同日石炭 三十噸 飲料水  
 十噸ノ補充ヲ終リタルモ南風強キ為メ出帆ヲ見合ハセ甚倦同  
 所ニ碇泊セリ然ルニ翌日二十四日午前十一時風位北西ニ變ニ疾  
 風トナリ同日午後四時頃より風力益々増加シ本船ハ走錨シ  
 テ前記浮標ニ墜寄セラレトシタルヲ以テ投錨ニテ少シク前  
 進ニタル後再々双錨ヲ投シ錨鎖ハ兩舷トモ三千尋ヲ延ハシ前  
 記浮標より約一鐘ノ處ニ船首西北西ニ向ケ碇泊セリ然ルニ其  
 後風力稍劣ハタルニ依リ波審人善公ハ當時本船ハ首少ク  
 左舷前方約一鐘ノ處ニ本船ハ首ト殆ト同一方向ニ碇泊セル

0508

驅逐艦囀トノ中間ヲ通過シ老部ニ帰航セリト決意シ同九時出  
 帆用意ヲ命ジ一等運轉士ハ先ツ左舷錨ヲ巻揚ケ次ニ右舷  
 錨鎖一鏈鎖トナリトキ之ヲ船橋ニ報告シ尙命令ニ依リ巻  
 揚ケ中被害人善松ハ同時早急微速力前進ヲ令シ機関  
 フ種々ニ應用シテ前進シタルカ右舷錨鎖未タ張リ終リ  
 タル者ノ同錨ハ左舷後方ニ張リ此後巻ケハ垂下シタル左  
 錨ニ揺マリ又同錨ヲ曳キテ進行スルハ囀艦ノ錨鎖ニ揺  
 マル慮アルヲ以テ一等運轉士ハ其旨被害人善松ニ報告シ  
 タルモ囀艦クシテ船橋ニ達セズ聞モナク同錨ハ地ヲ離レタルモ  
 錨鎖ハ左舷錨ニ揺マリシテ以テ沖合ニ出テタルトキ一旦投錨  
 シテ之ヲ放棄スルノ必要アル旨船橋ニ報告シタルニ被害人  
 善松ハ未タ右舷錨ハ地ヲ離レサルモノト聞キ誤リ此後  
 進行セハ同錨カ囀艦ノ錨鎖ニ揺マル慮アルモノト誤信



同時四十七分 撥開全速力後進ヲ令スルヤ 船首左舷ニ  
 回轉スルト同時ニ本船ハ風圧ヲ爲メ壓流セリ同時本船  
 邊ニ本船右舷船胸ハ殆ト直角ニ 曙艦ノ船首材ニ接  
 触シ其後兩船並行スルニ至リ風波爲メ相撞觸シ約十  
 分ヲ經テ隔着スルコトヲ得取調ヘテ結果本船ハ外板ニ輕  
 微ノ凹入ヲ生シタルニ過キサリニ也 曙艦ハ船首材左舷ニ急曲  
 ニ同材ト外板上ノ鉸釘切斷ニ左舷側外板ハ船首ヲ四吹  
 ノ間水準線以上ニ深ニ三吋ノ凹凸ト亀甲板ニ最大幅ニ二  
 尺七吋以下ノ破孔ニ箇ヲ生シ左舷上縁ノ半内材ハ船首  
 ヲ五吹ノ間裂損シ導索蓋ハ毀損 曉艦ニ名事事實  
 ニテ其証憑ハ被害人ヲ提出シタル海難報告書大連  
 要港部參謀長ヲ當審判所長ニ宛テタル電報通知  
 及本件審査依頼書、曙艦長宮田源八ヲ第四驅

0510

函隊司令 堀江鶴彦ニ提出シタル 触衝報告書被審人  
 曙艦長宮田源八ニ提出シタル始末書、當所理事官村  
 尾武ノ照會ニ對シテ 曙艦長宮田源八ノ回答書、連  
 信局技師 杉江吉治ノ被審人ニ對シテ 海難調査及  
 連信局事務官 補佐 廣幡忠隆ノ一等運轉士 池田光琢  
 ニ對シテ 聽取書本 船舷海損 梅岡兩日誌 曙艦損傷  
 写真及 破損部 復旧費 概算書並ニ 被審人ノ當廷ニ  
 於ケル供述ニ 徴シテ 十分ナリトス之ヲ審按シテ 本件 接觸ハ  
 被審人 善松カ 強風ノ際 出港シテ 當ノ 船橋ト 船首  
 ト 間ニ 連絡ヲ 通スル 事 適宜ノ 方 法ヲ 講セザリシ 爲メ 一 等  
 運轉士ノ 報告ニ 對シテ 錯誤ヲ 生シタルニ 起因シ 其所爲ハ  
 海員ノ 微細 劣一 條第ニ号ニ 記述スルモ 其 損害 重大  
 ナリナルヲ 以テ 同條第ニ 條第ニ号ヲ 適用シ 處分スル 事トス

依り裁決スルコト也ノ如シ

被審人 牧本善松ヲ遺責ス

大正四年二月五日函館地方海員審判所審判延ニ於テ

言渡ス

地方海員審判所理事官 村尾武志 件ニ干渉ス

審判官長 地方海員審判所長 野本正一 印

地方海員審判所審判官 日高林三郎 印

同 竹下持志 印

地方海員審判所書記 吉倉鋆三郎 印

右曉事也

大正四年二月廿六日

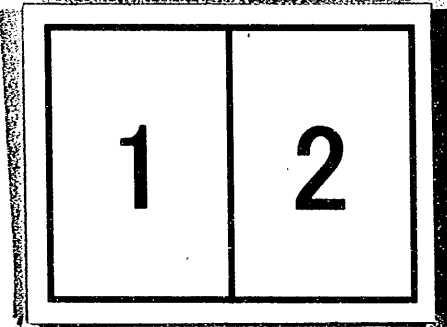
函館地方海員審判所

地方海員審判所書記 吉倉鋆三郎

印

0512

# 分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

0513  
0514

